

平成 27 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -4- 』

2015 年 11 月 10 日 (火) 第 5 回

「インドネシア語を学ぶことと教えること」

東京外国語大学大学院准教授

降幡 正志

東京外国語大学の降幡と申します。よろしくお付き合いのほどお願い致します。今日は、ちょっと無難なところで「インドネシア語を学ぶことと教えること」というタイトルをつけました。基本的にはインドネシア語を学ぶことに関わる話が主体になりますが、教えるときにどういったことで悩むかなどといったことも少しお話しできればと思います。

1. インドネシア語の概要

まず、インドネシア語そのものではありませんが、インドネシア語に関わる情報についてお話しします。系統として、オーストロネシア語族云々とあります。オーストロネシア語族という語族があって、インドネシア語はその系統に属している言語です。

インドネシア語が用いられる地域として、インドネシア共和国があります。人口 2 億 5 千万、日本の約 5 倍くらいの国です。そのインドネシア共和国の国語であり、かつ公用語として用いられています。もう一カ国インドネシア語を憲法の中でオフィシャルに定めている国があり、それはどこかという東ティモールです。東ティモールは 2002 年に独立、憲法には国語 (national languages) と公用語 (official languages)、実用語 (working languages) の 3 つが制定されました。インドネシア語は英語とともに実用語に位置づけられています。ただ、今、東ティモールはポルトガル語で教育を進めていて、それに伴ってだんだんインドネシア語の話者が少なくなっているようです。東ティモールについてはそれ以上詳しいことは存じ上げないので、これぐらいにしておきたいと思います。

インドネシア語はムラユ語 (マレー語) のバリエーションのひとつです。そもそもインドネシア語の前身のムラユ語はマラッカ海峡のあたりで用いられてい

た言語です。マラッカ海峡は古くから東西の交易の中継地点でした。そこではムラユ語が交易用の言語として使われるようになりました。ただ東西の交易のみならず、マラッカ海峡よりも東側の島々にも広く交易のルートがのびました。そのような中でこのムラユ語が現在のインドネシア地域にかなり古い時期から広まっていたのです。1600年代に入り実質上オランダの植民地となりました。およそ300年を経て、1900年代に民族運動が活発になり独立しようというときに、言語をどうするかということで、すでに広まっていたムラユ語を使うことになりました。その言語について、「我々はインドネシアという民族であって、インドネシアという祖国を持って、そこで用いる統一言語としてインドネシア語というネーミングをした」というようになっています。よくインドネシア語というのは人工言語と思われていますが、要するに、人為的にそのように定められたということで、言語としてはそもそも人工言語ではなく、ムラユ語の1バリエーションということになります。

2. 文法的特徴

2.1. 名詞句の語順: 被修飾語－修飾語

概略的な話はこれくらいにしておきまして、具体的にインドネシア語がどんな言語かというのを少しずつ紹介していきたいと思います。

まず「名詞句」についてお話しします。例えば「大きい本」、あるいは「私の名前」などといったフレーズの、中心となる語が名詞であるものを名詞句と呼びます。その名詞句の中の語順は、インドネシア語では「被修飾語－修飾語」となります。私自身は、これだけだとわかりにくいといつも思っているのですが、さらに説明を加えます。「中心となる語が先に来て、それに対して説明する語を後に続けていく」といった説明を加えるのです。例えば「私の名前」という日本語に対して、これがインドネシア語でどうなるかという、「名前」*nama*、「私」*saya* で *nama saya* という語順に、「インドネシア語」というフレーズも、「言語」*bahasa*、その後に「インドネシア」*Indonesia* と続けて *bahasa Indonesia* となります。「日本語と逆の語順になる」という説明がよくありますが、どうもこれがピンと来ないようです。そこで私は「まず中心となる語を先に言って大きな枠組みを設定しておき、その後に説明を付け加えて、だんだんと絞り込みをしていく、というような発想なんですよ」といった説明のしかたを用意しています。別に日本人とインドネシア人と脳みその構造が逆だとか、ということではなく、発想の違いなん

だという説明をするのです。このような語順はインドネシア語に特有なわけではなく、フランス語やスペイン語などヨーロッパの言語にもありますし、東南アジアの言語にも結構あります。発想として、大きな枠組みをまず言っておき、だんだん絞り込みをしていくのだという説明がどうもよさそうだと考えています。

これまでの例は、後に続くのが「私」や「インドネシア」など、いわゆる名詞でした。いわゆる形容詞の類も同様で、*anak kecil*「小さい子ども」は「子ども (*anak*) – 小さい (*kecil*)」という語順ですし、「最寄りの駅 (*stasiun terdekat*)」も「駅 (*stasiun*) – 最も近い (*terdekat*)」という語順になっています。

teman saya「私の友人 (*teman*)」に対して「その私の友人」のような場合は、*itu*「それ」という指示代名詞を加えて、*teman saya itu* となります。日本語では「私のその友人」もオーケーですよ？ しかしインドネシア語は *teman saya itu* の語順が崩せません。さらに、「その私の良き友人」は、日本語では「私のその良き友人」でも「良き私のその友人」でも一応大丈夫ですよ？ けれどもインドネシア語は *teman*「友達」、*baik*「良い」、*saya*「私」、*itu*「その」(*teman baik saya itu*) の順番が崩せません。実はここにもからくりがあります。まず大きな枠組みを先に言っておきますが、その後いくつか修飾語を続けるときには、一般的な属性を表すような語がまず先にきて、所有者（持ち主）がその後続きます。そして最後に「これ」または「それ」といった指示詞がきます。一つのフレーズの中にこれらの修飾語を使うとしたら、この順番で述べていくという決まりがあるのです。

インドネシア語の *teman saya* を日本語の「私の友人」と比べると何かが足りないですよ。日本語には「の」という要素が出てきます。「私友人」とは言えず「私の友人」となります。インドネシア語には文字あるいは音声には出てきていませんが、実は同じ機能を果たしているものがあります。それは、要するに語順なのです。つまり、この語順で現れることで「私の友人」のことを表します。

ところで、「小さい部屋」と言おうとして「部屋」*kamar* と「小さい」*kecil* をこの語順で並べても、実は「小さい部屋」ではなく「トイレ」を意味するといったケースがあります。あるいは「歳とった人」と言おうと思ってそのまま続けると「親 (*orang tua*)」になってしまうというように、組み合わせによってはある特定の事物を指し示すこともあります。では「歳をとった人」と言えないのかというと、ここでは触れませんが実際にはきちんとする手段があります。

rumah sakit「家－病氣」は、家が病氣というわけではなくて、「病院」のことで

す。オランダ語で「病院」を *ziekenhuis* と言いますが、同じように *ziek* 「病気」の *huis* 「家」という語構成になっています。それをインドネシア語に取り入れる際に、それぞれの語にインドネシア語を当てはめて、インドネシア語の語順で言っているのだと推測できます。また *rumah makan* は家が食べるわけでも、家を食べるわけでもなくて「食堂」です。*kecil, tua, sakit, makan* などは形容詞や動詞と呼ばれるものです。形容詞とか動詞とか名詞とか、軽々しく言っていますが、実はこのような品詞分類は大問題なのです。このことについては後ほどまたお話しします。

2.2. 文の基本構造:主語一述語

もう少しインドネシア語について基本的な話をしていきます。「インドネシア語って SOV ですか？ SVO ですか？」とよく訊かれますが、その質問に答える前に、インドネシア語の文の基本的なパターンは「主語一述語」であるとまず答えます。なぜかという、SOV や SVO というのは、文の構造の中に動詞があって当たり前という発想ですが、実はインドネシア語では動詞を使わなくても文ができてしまうからです。例えば「私は学生だ」というのは、「私」*saya*、「学生」*mahasiswa* の2語だけで文ができてしまいます。あるいは、*mobil* 「自動車」、*saya* 「私」で「私の自動車」*mobil saya*、それに *besar* 「大きい」を続けるだけで文ができます。いわゆる動詞を使って、例えば「食べる」*makan* という語を使うとき、それを補う語は *makan* の後に出てきて *Mereka makan roti*. 「彼らはパンを食べる」(*mereka* 「彼ら」、*makan roti* 「パンを食べる」) という語順になります。同じように、*belajar* 「学ぶ」という語を使って、*Dia belajar bahasa Jepang*. 「彼(女)は日本語を学んでいる」というように、*belajar* 「学ぶ」に対して、それを補う語を後に続けます。

次は *Kita menyeberang di sini*. という文です。*kita* 「我々」の次の *menyeberang* 「渡る」という語には、頭の方に変なもの (*meN-*) がついてるのですが、これは *meN-* という接頭辞つまり文法的な部品で、この接頭辞については後ほどお話しします。*di sini* は「ここで」という意味です。「我々はここで渡る」というと日本語では変ですよ？ 状況が浮かばないかもしれません。実はインドネシア語には「私たち」に相当する語が2つあります。1つはこの *kita* で、話し相手を含む「私たち」、もう1つは *kami* という語で、こちらは話し相手を含まない「私たち」です。話し相手を含んで、もしかしたら更に他の人も含むであろうという「私

たち」が *kita* で、話し相手を含まずに他の誰かを含んでというのがもう 1 つの *kami* です。例えば「私たちの問題」というフレーズは、「私たちの問題なんだから、あなたも一緒に考えなきゃだめだよ」といった場合には、話し相手を含む「私たち」すなわち *kita* を使います。「これは私たちの問題だからほっといて」であれば、「あなたは関係ないんだから」ということで話し相手を含まない「私たち」つまり *kami* になります。他には、例えば皆さん方が私に対して“*Kita makan.*”と言うと、私は嬉しくなります。「私」を含んでいるので誘ってくれたことになるからです。もし皆さん方が“*Kami makan*”と言うと、私はがっかりして部屋の隅でしくしく泣くことになります。ある程度はイメージができたでしょうか。

先ほどの「我々はここで渡る」は、「我々はどこで渡るのかな」といった質問をされたときに、「ああ、ここで渡らなきゃいけないだよ」「ここで渡るんですよ」と説明したり、あるいは先ほどの「私たちは食事します」と同様に「ここで渡りましょうよ」というように誘いかけをしたりなど、状況によりますがこの *kita* を使うことによって言い表すことができます。もう一つ、*Mereka memakai kacamata.*「彼らはメガネをかけている」(*mereka*「彼らは」、*memakai*「使う／着る」、*kacamata*「メガネ」)という文の中で、*memakai* にも *meN-* という接頭辞が付いています。

先ほど言いましたけれども、文の基本構造は「主語－述語」で、述語の部分には名詞の類も、形容詞の類も、動詞の類も来ることができます。更には、前置詞句も述語として成り立ちうるなど、いろいろな要素が来ることができます。

2.3. 語構成の特徴: 接辞と重複

もう一つのインドネシア語の文法的な特徴として、文を構成する要素つまり語がどのような構成をするのかという点についてお話します。インドネシア語の大きな特徴の一つとして、接辞という要素をよく使います。接辞とは、意味の中心となる部分（語基あるいは基語）に付いて意味や文法的な働きを変えたりする要素です。先ほど部品という言い方をしましたが、接辞自体はそれ単独で一人歩きすることはなく、他者に付くことによってその威力を発揮するという部品です。接辞のうち、中心となる語の前に付くものを接頭辞といいます。先ほどの *belajar*「学ぶ」には *ber-* という接頭辞が、*menyemberang*「渡る」や *memakai*「使う／着る」には *meN-* という接頭辞が付いています。先ほど出てきた *stasiun terdekat*「最寄りの駅」の *terdekat* も、*dekat*「近い」に *ter-* という接頭辞が付いて「最も近い」

という意味を表します。一方、接尾辞は、何かの語の後に付くものです。さらに、接頭辞と接尾辞が同時にくっついて一つの働きをするというタイプもあります。これは共接辞もしくは接周辞と言ったりすることもあります。インドネシア語はこのような接辞の使い方がとても豊富で、これによってインドネシア語の語彙がかなり広まります。もう一つ、基語の中に挿入されて使う接中辞という要素もありますが、幸いなことに、現代のインドネシア語には機能的な接中辞がなく、共接辞まで把握していればいいことになります。

他に、語の繰り返しによる重複という語の作り方があります。これは、ただ単にいわゆる強調するために、*He is a very very kind guy.* というように繰り返すのではなく、重複することによってある一定の機能を持つことになります。例えば、「人」*orang* を重複させた *orang-orang* はだいたい日本語の「人々」のような意味になります。日本語にも重複の形態が豊富にあるので、日本語の話者にとってはこのような感覚はそれほど難しくないはずです。ただ、どういうわけか *langit* 「空」を繰り返すと *langit-langit* 「天井」になったりするなど、語によっては繰り返すことによって「空の如きもの」のように別のものを表すこともあります。一方、*masing-masing* 「それぞれ」、*kupu-kupu* 「チョウチョウ」などは、*masing* や *kupu* を単独で使うことがなく、繰り返して初めて意味を持つタイプもあります。

ここで *jalan* 「道」を例にとります。余談ですが、『じゃらん』という旅行雑誌の名前はこの *jalan*、つまりインドネシア語です。この *jalan* を繰り返して *jalan-jalan* とすることで、「道」だけれども一本じゃなくて二本三本あるいはそれ以上、つまり道が複数あることを表すことができます。また、接頭辞 *ber-* をくっつけて、*berjalan* となり、これで「進む」「動く」という意味になり、更にこの接辞と重複を組み合わせて *berjalan-jalan* で「散歩する」という意味になります。これは「道々する」という感じでしょうか。ただし実際の会話では *ber-* をつけず *jalan-jalan* だけで「散歩する」という意味でよく使います。

satu 「(数字の) 1」を元にしてどれだけの語ができるか見てみましょう。*ber-* を付けて *bersatu* 「団結する」、*meN-* をつけて *menyatu* 「1 つにまとまる」、接尾辞 *-kan* を伴って *menyatukan* 「ひとつのところにまとめる」、*mempersatukan* 「統一する」や *penyatu* 「何か統一させるもの、まとめるもの」、*persatuan* 「団結させるもの」。それから *persatuan* 「団結、統一」、*penyatuan* 「まとめること」、*kesatuan* 「単一性」、*satuan* 「単位」。重複させて *satu-satu* 「1 つずつ」、さらに *-nya* という要素をつけて *satu-satunya* 「唯一の」。

「大きい」*besar* を元にした例も挙げます。接頭辞 *ter-* をつけて *terbersar* 「最も大きい」、*meN-* を伴って *membesar* 「大きくなる」。接尾辞 *-kan* がつくると *membesarkan* 「大きくする」、これは実際には「育てる」という意味でよく使います。*memperbesar* 「拡大する」。*membesarkan* も *memperbesar* も「～を大きくする」ということですが、*membesarkan* の場合は、例えば子どもを育てていくと年月が経つにつれて姿形が変わっていくように、大きくすると姿形が変わります。それに対して *memperbesar* は、拡大コピーをするように姿形は変わらず大きさだけ変わるというイメージです。重複が関わると *menbesar-besarkan* 「誇張する、わざと大きく見せる」となります。*pembesar* 「お偉方」、*pembesaran* 「肥大」、*kebesaran* 「偉大さ、大きすぎる」、それから *sebesar* 「～ほどの大きさ」、*sebesar-besarnya* 「最大限の」、*besar-besaran* 「大々的」。これらのように接辞や重複の組み合わせによって元の語（基語）から非常にバリエーション豊かに語が派生してできあがっていきます。

3. 学ぶ／教える際の困難な点

3.1. 品詞分類の限界

学ぶ際に、あるいは教える際にどういうところが難しい点であろうかということをお話します。

まずは品詞分類についてです。何気なくやっていますが、よくよく考えると行き詰まるところが結構あります。特になにも構わず名詞などと始めますが、その後は「いわゆる形容詞」とか「いわゆる動詞」とかというように、「いわゆる」という弱気な発言をしてしまいます。なぜそんな弱気な発言になるかということ、どうしても限界があって、スパッときれいに分けることがなかなかできないからです。インドネシア語で出てくる一般的な品詞としては、名詞、代名詞、動詞（自動詞・他動詞）、形容詞、副詞、助動詞、前置詞、接続詞、感嘆詞、数詞などがあります。疑問詞というのもありますが、疑問詞はかなり振る舞いが違います。また実際には数詞も振る舞いが違ってきます。

例えばどういったところにこの品詞分類の限界が見えるのでしょうか。*rusak* という語は「壊れる」というプロセスを表すのか、「壊れた」状態にあるのか、実はどちらも言い表します。プロセスを表すのであれば動詞、状態を表すのであれば形容詞。しかし両方表すのであればどうすればいいのか、といった悩みどころがあります。一応、*rusak* はスタンダードには動詞と分類されていますが、果

たしてそれでいいのだろうかと頭を痛めます。英語であれば、壊れた状態であったら **be** 動詞を使ってというように、動詞と形容詞の違いは述語の中心的要素として働くか働かないか、という基準があります。一方インドネシア語は、動詞であろうが形容詞であろうが名詞であろうが述語の中心的な部分を担います。つまり英語のように述語の中心的な要素を担うか否かで動詞なのか形容詞なのかという差が測ることができず、「私の自動車は壊れている／壊れた」の両方を意味することがあり得るのです。

hujan という語はたいてい「雨」という名詞であるとまず説明します。「雨が降っているところです」と言おうとする場合、“**Hujan sedang turun.**”とすればどうも名詞っぽいのですが、**hari** 「日」を天候や時間帯を表す際の主語として使って“**Hari sedang hujan.**”とすることもでき、この場合 **hujan** が「雨が降っている」という様態を表す位置に出てきています。そうするとこの **hujan** は果たして本当に名詞と言い切っていいのだろうかと悩んでしまいます。

次に **termasuk** という語です。これは **masuk** 「入る」に **ter-** という接頭辞がついてできていて、“**Nama saya termasuk dalam daftar.**” 「私の名前は (**nama saya**) リストの中に (**dalam daftar**) 含まれています」という文にあるように「含まれている」といわれる動詞としての使い方もすれば、“**Evie memanggil nama-nama beberapa orang.**” 「エフィ (**Evie**) は、私の名前を含めて (**termasuk nama saya**) 何人かの名前を呼んだ (**memanggil nama-nama beberapa orang**)」と前置詞のような振る舞いをしたりというように、同じ語であっても異なる振る舞いをすることもあります。

接辞が品詞のラベルと結びつけられることがあります。例えば、先ほどの **belajar** 「勉強する」には接頭辞 **ber-** がついていましたが、この **ber-** という接頭辞は動詞を作る働きをするという説明の仕方がよく見られます。しかし、果たしてそれで本当にいいのだろうか。他に、**berpakaian** 「服を着ている」は **pakaian** 「服」に **ber-** が付いていて、“**Mereka berpakaian seragam.**” 「彼らは制服を着ている」(**seragam** 「制服」) という文では動詞と言ってもいいかという気はします。しかし、“**Saya membeli kartu pos bergambar**” 「私は絵葉書を買った」の “**kartu pos bergambar**” はこれでひとまとまりのフレーズで、**kartu pos** 「葉書」だけでも **bergambar** 「絵つき」のものということになります。**bergambar** は意味的には動詞的かもしれないけれども、**kartu pos** を修飾していて、修飾するのなら形容詞だろうというような議論になったりもします。

接頭辞は特定の品詞を作るとかいうのではなくて、こういう意味で使われて、語によって文の中でこういう使い方をすれば動詞だし、こういう使い方をすれば動詞的な働きとはちょっと違うと言えるのではないかと思います。私自身が例えば *ber-* という接頭辞を説明するときに「動詞もしくは動詞的なプロセスを表す語を作る」というように曖昧な言い方をしてしまいます。ただ、動詞を作るというふうにはやはり言い切れない、という側面があります。

かといって全くめちやくちやくで何の区別もできないカオスな状態なのかというと、そうでもありません。日本語でも他の言語でもよく言われますが、自立語と付属語という区別はまずできそうです。自立語とは、それ単独で一つのフレーズを作れる語です。それに対して、付属語は他の語とくっつかないとフレーズとして現れません。例えば先ほどの “*Kita menyeberang di sini*” 「我々はここで渡る（渡りましょう）」で、*kita* 「我々」や *menyeberang* 「渡る」は単独で一つのフレーズを作ります。一方、*di sini* 「ここで」には *di* という前置詞がありますが、前置詞は単独で現れるわけにはいかず、必ず場所を表す語句が後に続かなければなりません。先に挙げた品詞のうち、前置詞や接続詞などの類はその語単独ではフレーズとして成り立ち得ないことから付属語といいます。

また、名詞とそれ以外というくくり方もある程度できそうです。名詞と名詞でないものをどのように分けるかということ、否定する語が違います。「私は学生ではない」というときには *bukan* という否定語を使って “*Saya bukan mahasiswa.*” となります。それに対して、「彼（女）は日本語を勉強していません」のように *belajar* 「勉強する」を否定するときは一般に *tidak* という別の否定語を使って “*Dia tidak belajar bahasa Jepang*” となります。ただし、*bukan belajar* 「勉強しているのではない」というフレーズもあり得るので、これも基準としてちょっと怪しいというところではありますが、「私は学生である」は *tidak* では否定できません。要するに、*bukan* でしか否定できないという一群の語があるのです。一方で *bukan* でも否定しないことはないけれども基本的には *tidak* を使うというのが一つの基準となりますが、*bukan* で否定するケースもあり得るので、「*bukan* は名詞を否定する」という言い方は危険です。大体の学習書では *bukan* は名詞を否定する、*tidak* は名詞以外（動詞や形容詞）を否定するという説明をしていますし、私自身も実際に教えるときにはまず最初にそのように説明します。このようなやり方は、教育文法とでも言えばいいのでしょうか、教えるときの効率性を考えて、典型的なパターンとしてはこうだとまず言います。そして後から「実はこういう

のもあったりするんだけどね」という話をしてだんだんに修正していきます。そのようにしないと、どうにも教えきれません。なお、実際のところでは、*bukan* と *tidak* では否定の論理が違って、特に「～ではない (*bukan*)」というのは、相手の頭の中にあるものを否定するという論理があり、相手の頭にあるものについて「それは違うんだよ」「ノットイコールなんだよ」という否定の仕方をするのだとよく言われます。

3.2. 「主語」とは何か

次に、「主語とは何か」についてお話しします。これもかなりの大問題です。どういうところで大問題かという、外語大に来ている学生でも、中学校や高校で英語を習ったときに「主語」とはどのようなものかあまりきちんと区別しないまま、結構勘違いしていることが多いのです。例えば、“*Saya sudah mengirim surat itu.*” 「私はもうその手紙を送りましたよ」という文では、*saya* 「私」が主語で *sudah mengirim surat itu* 「もうその手紙を送った」が述語となります。*mengirim* 「送る」という動作からみて、主語の位置に来ているものがたまたま「送る」という動作をする人になっています。この文では、文法的な部品である「主語」と、「その動作をする者」という意味的な側面を区別する必要がありません。確かに主語と動作をする者が一致する文が多いこともありますし、例文を用意するときもそのような文が多くなります。ところが、実は文法の話と意味的な話は別レベルで、そのことを口を酸っぱくして言っても学生はなかなか納得してくれません。

先ほどの文に対して、「その手紙は」というフレーズで言い始めてみます。残った要素は「もう私は送りましたよ」ですが、細かい説明は置いておき、接頭辞 *meN-* が付かない *kirim* という形を使って、“*Surat itu sudah saya kirim.*” 「その手紙はもう（私が）送った」となります。この文型は、動作をする人（動作主あるいは主体）が基本的に1人称（話し手）か2人称（話し相手）の場合に用いられます。もう一つ、「その手紙はもう」に続いて接頭辞 *di-* がついて *dikirim* となり、さらに *olehnya* 「彼（女）が」がその後に来て“*Surat itu sudah dikirim olehnya*” 「その手紙はもう彼（女）が送った」という文ができます。接頭辞 *di-* を用いるこちらの文型は、基本的に動作をする人が3人称の場合になります。

“*Saya sudah mengirim surat itu.*” 「私はその手紙をもう送った」と “*Surat itu sudah saya kirim*” 「その手紙はもう（私が）送った」、 “*Surat itu sudah dikirim olehnya*” 「その手紙はもう彼（女）が送った」の三文は、「私」と「彼（女）」が違う以外

は、伝えようとする内容の事実関係はほとんど変わりません。「私」または「彼・彼女」という人物がいて、「その手紙」があって、それを「送る」という動作をするということですが、インドネシア語では送る動作をする人を主語とする場合と送る対象物を主語とした場合とでこれらのパターンの違いが現れます。ところが、“Surat itu sudah saya kirim.” について「この文の主語は何？」と聞くと、学生は大抵 *saya* と答えてしまいます。主語というものは、「主語－述語」という文法的な枠組みの中の要素であると説明しているにも関わらず、動作をする人（動作主・主体）という意味的な側面は区別が結構つけにくく、別レベルの話であるということ咀嚼しにくいというところがあります。

このことは、実生活の中でも、例えば誰かが何かをやったときに「主語は何ですか？」というようなつっこみ方をすることがあります。「それは主語ではなくて動作主だ」と逆につっこみたくなることです。要するに、文法的な枠組みと意味的な側面が別レベルであるというところをどうしても認識しないまま、簡単に「主語」と言ってしまうのです。学生が英語を学んだときの癖が抜けないというところが教えるときの困る点のひとつで、英語頭をいかに崩すかというのも、私の役割の一つと思っています。とは言いながらも、「こういうとき英語ではこういうよね？」と英語の力を借りたりすることもあります。持っている知識を活用して、それを土台にして理解をしていくというのは悪いことではないと思います。実際に語学学習というのは本当にゼロから、全くの無地からその言語だけで学んでいくというやり方もありますが、第二言語、第三言語を学習するときには、既に持っている知識との対照をするところが必ずあります。こういったところが似ている、こういったところが違うというような説明はどうしても避けて通れませんし、むしろ使ってもいいだろうと思います。

主語と動作主がイコールであればすんなり入ってきますが、主語が意味の面から見た動作主と違うんだというのがなかなか学生には理解がしにくいところです。だからこそそれをいかに理解させるかというのが教師の役割であろうかと思えます。ただこれは時間がかかるもので、とにかく繰り返しやるしかありません。実は私自身もこのパターンを理解するのに結構時間がかかりました。学生がなかなかわからないといってもしかたないだろうと思います。時間をかけて練習を繰り返しやるが必要となります。

3.3. 文法構造と情報構造

文法的な側面の他に、情報構造、つまり情報をどのように伝達するのかという側面から見た分析の仕方があります。文法的な構造から見た場合の部品は主語と述語です。主語と述語は何かしら文法的な関わりがあります。例えば英語では “I speak English.” に対して “He speaks English.” のように「三単現の s」という要素を使います。つまり He を主語とした場合には、その後に出てくる speak は speaks にしなくてはならないという文法的な約束があるからです。

インドネシア語で “Orang itu berangkat” 「その人は出発した」という文で orang itu 「その人」に対して berangkat 「出発する (した)」には英語で「三単現の s を使う」などといった文法的な約束事はありません。saya 「私」を主語として “Saya berangkat.” 「私は出発する (した)」、あるいは mereka 「彼ら」を主語として “Mereka berangkat.” 「彼らは出発する (した)」のようにいずれも berangkat をそのまま使います。しかも berangkat は日本語では「出発する」あるいは「出発した」、つまりインドネシア語にはありがたいことに時制による動詞の変化がありません。どこで表すのかというと、まず一つは先ほど出てきた sudah 「すでに～した」を使うと「既に出発した」ということがわかります。また例えば kemarin 「昨日」と言えばそれだけでいつ出発したかがわかります。このようにいわゆる助動詞の類を使ったり、時を表す語を使ったり、さらにはそのようなものがなくても話の流れつまり文脈やその場の状況でわかることもあります。時制による動詞の活用を覚える必要がなく、「食べる」「食べた」「食べるよ」「食べなさい」のいずれも全て makan で言えます。

ただ、この間に文法的な関係を表す要素が全くないわけではなく、例えば「出発した人」というフレーズを作るときに、yang という語 (いわゆる関係代名詞) を使って orang yang berangkat 「出発した人」といったフレーズができるかどうかの一つの指標になります。また一部の語群では、この主語に対して meN- という接頭辞を使うか使わないといったことも、いわば文法的な関係です。

このような文法的な構造がある一方で、情報伝達の構造は必ずしもそういった文法的な枠組み、もしくは約束事にとられるものでも必ずしもありません。この情報構造の分析に使う基本的な部品として、topic (主題) と comment (題述) があります。comment については日本語では定訳がなく、ものによっては「評言」や「叙述」ということもあります。

“Orang itu berangkat ke Jakarta kemarin.” という文は、orang itu 「その人」、

berangkat「出発した」、ke Jakarta「ジャカルタへ」、kemarin「昨日」という4つの構成要素に区切ることができます。文法的な構造からいくと、orang itu「その人(は)」berangkat「出発する(した)」の2つの構成要素が文法的には枠組みになり、残りの ke Jakarta「ジャカルタへ」と kemarin「昨日」は文法構造からみるといわばプラスアルファの要素となります。ところが、同じ字面であっても、「その人が昨日出発したのはジャカルタへだ」、「その人がジャカルタへ出発したのは昨日だ」、という異なる情報の伝達ができてしまいます。その際にイントネーションのパターンが大きな役目を果たします。

“Orang itu berangkat ke Jakarta kemarin.”のように、orang itu berangkat「その人が出発した」を topic として、その topic に応じて話し相手に伝えたい情報すなわち comment が ke Jakarta「ジャカルタへ」の部分となり、「その人が出発したのはジャカルタへなんだよ(昨日だけどね)」といった情報を伝えることができます。あるいは“Orang itu berangkat ke Jakarta kemarin.”のように orang itu berangkat ke Jakarta「その人がジャカルタに出発した」を topic とし、その comment として kemarin「昨日」を伝えたい情報の中心部分とする、つまり「その人がジャカルタへ出発したのは昨日だ」ともなります。これらをイントネーションのパターンで言い分けることができるのです。

この他に、例えば日本語で「象は鼻が長い」という文がありますが、この文は「象の鼻は長い」とは事実が同じでも伝えたい情報が違ってきます。「象の鼻は長い」では、「象の鼻は」をテーマ(すなわち topic)にして「長い」ということを伝えることになります。その一方で「象は鼻が長い」というと、「象は/象に関していうと」がテーマ(すなわち topic)になり「鼻が長いんだよ」ということを伝えようとしています。このような表現を「二重主語文」と言うこともありますが、インドネシア語にもこのような表現方法があります。本当はインドネシア語ではスタンダードとは言い切れないのですが、実際にはフォーマルな文体でもよく用いられています。このいわゆる二重主語文も情報構造が大きく絡んでいます。

また、日本語で「僕には金がある。」という文がありますが、インドネシア語でも「私」「ある」「金」と言えます。これは言語学的な研究をするときに「私は」「持っている」「お金」という説明の仕方(つまり「所有」)で済ませてしまうことがあります。しかし、「ある」と「持っている」はやはり違うと考えられます。要するに「持っている」という所有の話なのか、「ある」という存在の話なのかということになります。インドネシア語の「私は金がある」という表現もスタンダー

ドとは言いがたいところがありますが、実際にはよく言ったりします。

もう一つ、「僕はウナギだ」という表現は「ウナギ文」という日本語学で非常に有名な文について触れておきます。これは「自分はイヌかウナギかというウナギですよ」ということも表すことができますが、食堂に行って料理を何か注文しようというときに「お前何にする?」「うん、僕はウナギだ」つまり「私は／僕はウナギを注文する」「僕はウナギを食べる」ということを表すこともできます。インドネシア語でもそういった言い方ができます。さらには、日本語で「もう飯食った?」「うん、食った」というやりとりは、主語を言っていないから英語と比べて曖昧だと言われることもありますが、やりとりがきちんと成立しているのだから実際には曖昧ではなく、しかも会話している二人の間柄というのがかなり推測することさえできます。このようなやりとりはインドネシア語でもよく出てきます。その他いろいろなところで情報構造という観点からいくと面白いところがあります。言語研究はスタート地点として文法的な構造を追求していくところにあり、それなりの成果をおさめています。それだけではどうしても説明しきれないものもあります。情報をどうやって伝達するかという側面から見ると、いろいろと説明がつく、もしくは説明がつきそうなものがある、といったことも言えるでしょう。

4. 多層言語社会インドネシア

4.1. 地方語とインドネシア語

インドネシア語を教える際に、あるいは学習する際に、別の面で楽しいところでもあり大変なところでもあるという部分があります。インドネシアはその地域柄、言語の層が幾重にも重なっているといえます。インドネシアと一言で言っても、西から東まで 5,000 キロ以上、アメリカ合衆国と同じくらいの横幅があり、全部で 13,500 ぐらいの島から成り立っています。その全ての島に人が住んでいるわけではありませんが、そのような中で、インドネシアには何百にもものぼる地方語があります。実際に言語がいくつあるのか未だにはっきりとは言えません。Ethnologue という web サイトを見ると、719 という数字が挙がっています。ただ、Ethnologue には○○語××バリエーションという記載も結構あるので、数字をそのまま鵜呑みにするわけにはいきませんが。また、5 年ほど前に日本の国語研究所に相当する機関が刊行した小さなパンフレットには言語の名前が 500 近くリストアップされていました。こちらも重なるものがあつたりしますが、いずれにして

も〇〇語と呼ばれるものが何百とあるのです。

その中で特に有名な言語としてジャワ語があります。ジャワ島をおおよそ3つに分けて、真ん中と東がジャワ (Jawa) という文化圏、残りの西側3分の1の大部分がスンダ (Sunda) という文化圏です。ジャワの文化圏が全国のおよそ40%、の人口を占めています。15%くらいがスンダで2番目に続きます。

ムラユ (Melayu: 3.7%) は、先ほどお話ししたとおり、もともとマラッカ海峡のあたりで用いられていましたが、歴史の流れの中で、インドネシア地域のあちこちに古くから飛び火するように分布しています。バタック (Batak: 3.6%) はスマトラ島の北の方にトバ湖という湖の周辺になります。マドゥラ (Madura: 3.0%) は、ジャワ島の右上ある横長の島です。ブタウィ (Betawi: 2.9%) は、首都のジャカルタあたりになります。ジャワ島の西3分の1がおおよそスンダだと申し上げましたが、それに取り囲まれるようにして、首都のジャカルタのあたりがブタウィという別の文化圏です。バリ (Bali: 1.7%) は観光地として有名なバリ島です。そして、華人系 (Tionghoa) が少なからずいて、1.2% となっています。2億5000万の1.2% ということは、300万人もいるということになりますが、もっというような気がします。これらの数字は CIA の The World Factbook というサイトから数字を引用しました。

地方語でも大きいところはやはりそれなりに生きていますが、小さい言語、つまり話者人口の少ない言語もたくさんあり、おそらく急速に話し手がいなくなってしまうことが予測されます。ある地域に行くと、インドネシア語ではなく別の言語を使っているの、例えばスンダという地域に行くのであればスンダ語ができないといけないかという、実はそうでもありません。今、だいたいどこに行ってもインドネシア語が通じます。しかもインドネシア人はインドネシア語を使うと、「え！ インドネシア語できるんだ」とニコニコほほえんでくれます。ただ、地元の人達は地元の言語、例えばスンダ地域であればスンダ語を使っています。そのような中に私などが入っていくと、インドネシア語になったり英語になったりというようなことがあったりします。

また、例えばスンダの地域の人たちが使うインドネシア語はスンダ語訛りだったりします。スンダ語特有の表現をインドネシア語に移したり、あるいはスンダ語の要素を取り込んだりなどということもあります。ちなみに、私自身がインドネシア語の他にスンダ語も研究しているので、スンダ語の宣伝も兼ねてこのようなお話をしている次第です。インドネシア語の会話で “Bikin jadwal mah gampang.”

「計画を立てるのは簡単だ」(bikin「作る」、jadwal「計画」、gampang「簡単だ」)という表現があって、この中に現れている mah という語がスダ語に由来しています。ジャカルタのスダ文化とは関係ない人たちも割にこの mah という語を使っています。この mah は、「計画を作るのは簡単だ」の「は」で、「だけど実行するのは難しいけれどね。」というような裏側の意図まで含めています。日本語でも「私は構いませんよ」と言った場合に「あなたはどうか知らないけど」「他の人はどうか知らないけど」と比較対照の意図を込めて使ったりしますが、mah というのはまさにそれです。以前、ジャカルタ出身の人と話をしていた、私がちょっとスダ語を話すと、「自分はスダ語ができないから」と拒絶反応を示すのに、もともとスダ語の mah を使うことがあり、「今 mah を使ったよね」というと「だって便利なんだから」という返事がありました。つまり mah はスダ人に限らずインドネシア語の会話の中でしばしば使われています。民族集団としては圧倒的にジャワ人が多く、そのためジャワ語の語や表現がインドネシア語の中にたくさん入っています。

4.2. フォーマルなインドネシア語と話し言葉: 映画のセリフから

首都のジャカルタは文化の中心地であり情報発信地でもあります。数的なマジョリティがジャワだとすると、質的なマジョリティがジャカルタということができると思います。そうすると、ジャカルタ発の話し言葉が全国に広まっていくという現象も起こります。フォーマルなインドネシア語に対して、話し言葉、特に *bahasa gaul* と呼ばれるバリエーションがあります。*bahasa* は「言語」、*gaul* は「交流する」という意味です。会話体の中でも特に *bahasa gaul* と言った場合はよく若者言葉と説明されることもありますが、こうした会話体はジャカルタ(プタウィ)の方言がベースとなり、それに加えてスラングなど新しい要素を取り入れてできあがっているのが *bahasa gaul* です。例文 (*Gue belum sreg aja ama dia* 「私はまだ彼に納得がいかないのよ」) を見てみると、スタンダードなインドネシア語では “*Aku belum enak saja kepadanya.*” となります。ちょっと見比べただけでも出てきている語がかなり違っています。例文の中で *gue* 「俺/アタシ」や *belum* 「まだ〜ない」などはジャカルタ(プタウィ)の伝統的な方言で、*sreg* 「納得がいく」はジャワ語です。*aja* 「〜だけ」はスタンダードだと *saja* に対応します。「誰々に」「誰々へ」という意味で *ama* という前置詞を使っていますが。実はこれは元々 *sama* という語です。つまり、スタンダードなインドネシア語の *sama*,

saja などが aja, ama といった具合に最初の s が落ちるというジャカルタ(ブタウィ)方言の特徴があり、それが bahasa gaul という会話体の中にも現れてきています。

別の例文 (Nyokap udah mutusin buat ninggalin bokap. 「ママはパパと別れるにもう決めたわ」) を、スタンダード的な表現 (“Ibuku sudah memutuskan untuk meninggalkan ayahku”) と比べてみると、udah に対して sudah が対応していて、先ほどと同じく会話体では s が落ちています。さらには、特にジャカルタ方言や現在の会話体 (bahasa baul) に共通する特徴として、前にお話しした meN- という接頭辞に対して、meN- のうちの N だけが現れます。ややこしい話をするので、これは基語の語頭音が p の場合、それに N の要素すなわち鼻音がかぶさって m に変化するのです。そのため putus が mutus のようになります。また ninggalin の基語は tinggal ですが、その語頭音 t に鼻音の要素が被さり n に変化して ninggal となります。加えて、スタンダードでは -kan という接尾辞に対してジャカルタ(ブタウィ)方言では -in という接尾辞が対応するので、会話体では mutusin や ninggalin という形になって用いられるのです。このジャカルタ方言の特徴が現在の話し言葉 bahasa gaul でも特徴として現れます。nyokap 「おっかちゃん」、bokap 「おとっちゃん」といった語はジャカルタ方言ではなくスラングから誕生したのですが、それが bahasa gaul の中で定着しています。

ジャカルタ方言では「俺/アタシ」には gua / gue という 2 つの形があります。ジャカルタの中でも地域差があって、a で終わるか e で終わるかというバリエーションになります。ジャカルタ方言の他の語でもそれが共通していて、先ほど出てきた語でも aja / aje 、あるいは ama / ame の両方があります。bahasa gaul では aje や ame とは言わず、一般的に a で終わる aja や ama を使います。ところがどういう訳か、「俺/アタシ」だけは gua ではなく gue で定着しているのです。これはちょっと面白いところではないかと私自身は個人的には思っています。

bokap 「おとっちゃん」や nyokap 「おっかちゃん」という語はスラングから来ているとお話ししました。ジャカルタ方言辞典という辞書があるのですが、数年前に改訂増補版が出版されました。以前の版ではこれらは載っていませんでしたが、改訂増補版には載りました。「これってジャカルタ方言なの？」と個人的には思いましたが、編者がそのように判断したということになります。

いずれにしても、このジャカルタ方言、会話体、特に bahasa gaul と呼ばれる

ような文体もかなり複雑で、地方語という存在もあるのでさらに複雑さが増すこととなります。そのため、教えるときにどこをターゲットにするのかというのがかなり悩ましいところです。スタンダードなインドネシア語を教えて、それで書いたり読んだりするのに使うというのも一つの方法ですけれども、そればかりではインドネシア人と喋ると「固すぎる」と笑われるということもよくあるようです。私自身も会話ではスタンダードな表現ばかり使うわけではなく、話し言葉的なフレーズもよく使ったりします。どういった文体をどの程度どのように教えるかが、教える方としては頭が痛いところです。これが例えば英語やヨーロッパの諸言語であればそれなりに研究も進んでいて積み重ねがあり、いろいろなアプローチがあります。インドネシア語はそれに比べるとまだまだ研究が十分とはいえないところもあり、この先インドネシア語を極めてくれる人がもっと増えてくれればありがたいのですが、なかなか語学をやろうという人がいないというのがまた頭の痛いところです。

拙い話ではありましたが、お付き合いくださいましてどうもありがとうございました。(完)

コラム 十

インドネシア（語）のあいさつ



I Gusti Ngurah Rai 国際空港（バリ）にて

… * * * ← ————— → * * * …

「インドネシア語で“こんにちは”はどう言うの？」とよく訊かれる。興味を持って覚えてくれるのはありがたいことだが、あいさつの表現は簡単に思えても実はさほど単純ではない。

まずは“Selamat siang”（selamat「平穏な」、siang「昼」）を教えたり覚えたりすることになるが、イコール「こんにちは」とはいかない。“Selamat siang”は会ったときにも別れるときにも使われる、つまり「さようなら」を意味することにもなる。日本語を少々学んだインドネシア人が別れ際に「それでは、こんにちは」と言うことがあるが、「こんにちは」が会ったときにしか使えないことを併せて学んでいないことに起因する。ただこれは、教師や学習書の問題とも言えるが。

逆に日本人は「さようなら」として“Selamat jalan”（jalan「道」）と“Selamat

tinggal” (tinggal「残る」)の2種類を学ぶことが多い。前者は立ち去る相手に、後者はその場に残る相手に対して言うのだと学ぶが、私自身は留学中を含め日常生活の中でこれらを使ったことがない。“Selamat jalan”は、遠出をする人に使われるのを耳にしたことがあるぐらいだ。それよりも別れ際には“Mari”「それでは」、あるいは“Mari, selamat siang”の方が用いられる。

“Selamat siang”や“Selamat pagi”(pagi「朝」)、“Selamat sore”(sore「夕方」)、“Selamat malam”(malam「夜」)なども、実はかなりフォーマルなあいさつ表現で、日本語の「おはよう(ございます)」「こんにちは」「こんばんは」ほどの頻度では使われない。イスラム教徒であれば、“Assalamualaikum”「あなたに平安あれ」というアラビア語のあいさつの方がむしろ自然に出てくるし、フォーマルな会合ではさらに長い“Assalamualaikum warahmatullahi wabarakatuh”とスピーチの冒頭で必ず述べる。

イスラム教圏でなければどうだろうか。2016年8月にバリ島デンパサールで開催された学会に出席した時のことである。学会実行委員長のスピーチは、バリでのあいさつ“Om swastiastu”「あなたに平安あれ」で始まり、その後に“Assalamualaikum warahmatullahi wabarakatuh”を続けていた。バリ島という土地柄を考慮してのことであろう。また同年11月にバンドゥン市内のあるキリスト教大学が主催した学術会議にも出席したが、ここでは大学のカラーゆえか、“Assalamualaikum...”を聞くことがなかった。

余談だが、バリの空港内のエスカレーターに乗っていたとき、“Om swastiastu”の掲示を見かけたが、すっと通り過ぎてしまい、写真を撮りそびれてしまった。

写真右上の“BALI”の文字の下にはバリ語で“MATUR SUKSMA”「ありがとう」、インドネシア語で“SAMPAI JUMA”「また会いましょう」と記されている。

インドネシア語を知るための3冊

・*・...‡...・*・*・*...‡...・*・...‡...・*・



降幡正志(2014)『インドネシア語のしくみ《新版》』, 白水社

見開き 2 ページをひとつの章として、インドネシア語の特徴を読み物の形式で説明しています。まずはインドネシア語がどのような言語か大ざっぱに知りたい、一度学習してみたけれど復習したい、といった人は是非手にとって気軽にお読み下さればと思います。

...・* ←—————→ *・...

原真由子(2013)『ニューエクスプレス インドネシア語単語集』, 白水社

「インドネシア語－日本語編」では約 3,500 語が掲載されています。単なる語義の説明にとどまらず、語幹や派生語の関係も記載してあります。「日本語－インドネシア語編」では約 1,000 語をジャンルごとに分類して掲載しています。コンパクトながら応用的な語彙学習にも向いています。



...・* ←—————→ *・...



小笠原健二/V.R.クマラニングルム(2016)『新版 一冊目のインドネシア語』, 東洋書店新社

丁寧な説明と豊富な内容で、入門者にも既習者にも好適なインドネシア語学習書です。本編 20 課に加えて、コラムでは語彙や表現の拡張と、文化や社会などインドネシア事情の説明もしています。

...・* ←—————→ *・...